

狂気と動物  
—武田泰淳『富士』における国家批判—

村上 克尚

**要旨**

本稿の目的は、武田泰淳の『富士』を、同時代の精神障害者をめぐる言説を参照しながら検討し、両者の共通性と差異とを分析することである。『富士』は、甘野院長や一条といった登場人物を通じて、患者を「人なみ」になるように「治療」しようとする試みや、患者を神のごとき超越者に高めることで尊厳を回復しようとする試みを批判的に描いている。これは、同時代の「反精神医学」的な言説と響き合う。それに加えて、『富士』の語り手である大島は、序章と終章において、動物をめぐる長大な思索を展開する。これは、健常者／精神障害者の区分が、国家による、人間／動物（＝生きるに値する命／生きるに値しない命）の分割に規定されていることを示唆する。最終的に、大島は、患者たちの依存し、寄生する繋がり、自分の身体を開いていく。ここから読み取られるべきは、依存的（＝動物的）な生を否認するのではなく、むしろそれに内在することで、国家が掲げる、自律的な「人間」の理念を解体していくという道筋である。この点にこそ、『富士』というテキストの独自性を指摘できる。

**キーワード：**武田泰淳、『富士』、精神障害者、動物、生の選別

**1. 問題設定**

1960年代末から70年代前半にかけて、「狂気」は人びとの関心を喚起するトピックの一つだった。その大きな要因には、大学闘争に象徴される若者たちの反逆の機運が挙げられる。「正常」な社会化のコースが、企業による公害の垂れ流しやベトナム戦争といった不正へと至るものなのではないかという疑問は、国家、社会、大学が定める「正常」の権威を改めて問いに付した。その中で、「狂気」として囲い込まれたものに可能性を見ようとする傾向も生まれたのである。

文学の場でも、社会運動とは一線を画しつつも、これらの機運への呼応が見られた。例えば、69年7月の『文藝』では、秋山駿、大江健三郎、川村二郎、野間宏によって、「文学と「狂気」」の座談会が組まれた。秋山は67年の『内部の人間』で、犯罪者の心理への強い関心を示していたし、大江も69年に『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』

を刊行していた。また、なだいなだ、北杜夫、加賀乙彦などの精神科医出身の作家の活躍も目立っていた。71年には、精神障害の当事者としての体験を描いた、小林美代子の『髪の花』が群像新人文学賞を受賞している。

武田泰淳の『富士』（『海』、69年10月～71年6月）もまた、同時期に、戦時中の精神病院を舞台にして書かれている。しかし、このようなコンテキストは、『富士』の宗教的主題の前に、しばしば見過ごされてきた。例えば、田久保英夫は、「武田氏の視線には、ほとんど大乘というより原始仏教的な世界感覚、形而上学的輝きがある」<sup>1</sup>と称賛し、柄谷行人も、「この小説はすでに精神病の問題などから遠くはなれて宗教的な高みに到達しているといつてよい」<sup>2</sup>と断言している。

近年では、佐藤泉が、同時代のコンテキストを参照した読解を提示している。佐藤は、『富士』が刊行された直後の72年に、ローマクラブが成長の終わりを宣言し、万人の生を保護＝管理する福祉国家体制が崩壊を始めたことを重視する<sup>3</sup>。また、別の論文では、同時期に、日本の精神医学界で、精神医学の権威主義的体制に対する異議申し立てが起こっていたことを指摘している<sup>4</sup>。大学闘争と密接に結びついたものとしては、69年の日本精神神経学会大会（通称金沢大会）での若き精神科医たちによる内部批判があり、同年の東京大学赤レンガ病棟の自主管理闘争がある。また、より広範な読者に精神病院の改革を訴えたものとして、70年に『朝日新聞』に連載された、大熊一夫の『ルポ・精神病棟』もあった<sup>5</sup>。『富士』は、これらの精神障害をめぐる運動や言説と響き合いながら成立したテキストだと言える。

本稿では、佐藤の読解の方法を継承し、同時代の精神障害をめぐるテキストを参照しつつ、『富士』の独自の位置を見定めることを目的とする。この際、『富士』が、精神障害者の問題を、動物の問題と重ね合わせながら描写している点が、重要な手がかりになるだろう。以下では、次の手順で議論を進める。まず、『富士』の序章に注目し、人間にとっての動物の問題が、精神障害の問題とどのように結びつくのかを考察する。次に、『富士』の主要な登場人物である、甘野院長、一条実見、大島実習生の三人の言動をそれぞれ取り上げながら、治療が持つ権力性、患者のアイデンティティ闘争の陥穽、そしてそれらを越えた先にどのような社会の構想が開けてくるのかについて、考察を進めていきたい。

## 2. 動物と精神障害者

『富士』は、戦時中に富士山麓の精神病院に実習生として勤務していた大島が、友人の精神病院院長に向けて、当時の様子を回顧し、手記を綴るという形式を取っている。現在の大島＝「私」が登場するのは、序章「神の餌」と終章「神の指」であり、そのあいだに全一八章の手記が収録されている。具体的な年代も明記されており、精神病院での事件が起こったのは「昭和十九年」＝1944年であり、手記が書かれている現在はその「二

十五年」後、すなわち 1969 年である。

現在の大島は結婚し、富士の麓に別荘を構えており、近隣の小動物たちに関する思考をめぐらせている。しかし、これは単なる随想ではなく、大島自身が、「私が医師と患者の関係について、思いなやむときにはきまって、人間と動物の運命的なつながりに話が行きついてしまうのである」(374) と語るように、精神障害者の主題を予告するものなのである。それでは、動物と精神障害者の結びつきとは、具体的にどのようなものだろうか。

「神の餌」は——つまり『富士』は——次のように始まる。

リスの尾の方がリスの顔つきより、感情をよくあらわしているにちがいがなかった。あたまの上まで尾を折りかえして、パンをたべていたリスと、長い尾をそのまま雪の上に敷いて食べるリスとでは、ずいぶん性格もちがうだろう。だが、私はいつも、一匹のリスが気分によって尾っぽのとりあつかいをちがえるのか、それとも、二匹の別のリスが習性として、ちがった尾のとりあつかいをするのかわからなかった。

(3)

冒頭から、「ちがいがなかった」、「だろう」という語尾で、語り手にとって、動物の感情が不可知に留まることが強調される。それどころか、語り手は、「リス」という種の同定はできても、個体の識別はできないことを告白している。もちろん、距離を縮め、時間をかけてコミュニケーションを試みれば、個体のそれぞれの性格は浮かび上がってくるに違いない。しかし、その手間を惜しむとき、多様な動物たちは、個性を剥奪され、「動物」という単一のカテゴリーによって暴力的にまとめ上げられるしかないのである<sup>6</sup>。

語り手は、自分の人間中心主義的な視野の背後に、もっと多様な世界が存在することを確信している。それは、次のような何気ない自然描写からも読み取れる。

木の根もとだけ、雪の面がくぼんでいる。あまり背のたかくない雑木の上の方から、陽が射しかけはじめる。すでに芽ぶいているうす緑いろの芽のツブツブが、陽のさしかけた部分だけ、ほんとうの色を示している。ほかの部分は、そんなこまやかな色の本質、変化にかかわらず、ただ灰色の線のままである。(3)

栗津則雄が指摘するように、ここでの語り手は、「見えるものと見えないものとのかわわりに対して、言わば必要以上に眼をこらしているようなところがある<sup>7</sup>」。「すでに芽ぶいているうす緑いろの芽のツブツブ」の「こまやかな色の本質、変化」も、陽が射さなければ、「ただ灰色の線のまま」に留まる。つまり、「光」を当てられた領域では、細かな差異が見えるのに対し、影となった領域、周縁に追いやられた領域では、全ての存

在が単色であるかのようにみなされるか、そもそも存在しないかのように思いなされてしまうのである。これが、人間の世界における、動物たちの世界に目を凝らすものの視野であることは明らかだろう。

次に語り手は、これも何気ない体験談に紛らせながら、動物の殺害可能性について言及する。

保護色がいいか警戒色がいいかと言えば、山の路をあるいているとき、私たちは警戒色をハッキリさせた方がいいと思う。それに手袋と帽子も、はめたりかぶったりしていた方がいい。猟師が霰弾を放つころは、ほかの土色や灰色と区別できる、あきらかな色を身にまもっていないと、動物とまちがえられるからあぶない。(4-5)

動物は、人間の法の保護の外部に置かれ、殺害すら許容されている。したがって、人間は、自分が「動物とまちがえられ」て殺害されないように、「警戒色」をはっきりさせる必要に迫られる。「灰色」の領域に追いやられ、カテゴリー化され、一人一人の顔が見失われたとき、その存在は殺害の危機にさらされる。そうならないために、人は社会の中で、「自分は人間である」、「生きるに値する生命である」という自己証明を行なわねばならないのである。

さらに、語り手は、「ネズミが可愛くなくて、なぜリスが可愛いかという問題」(8)について考え始める。人間は、ネズミを餌にかけて殺す一方で、リスには餌づけをする。しかし、両者は同族であり、見れば見るほど違いが分からなくなる。語り手は、「要するに餌の問題だ」と考える。つまり、人間の餌を食み、支配関係に従属するものが「可愛い」のであって、その取引に応じないものは害獣なのである。しかし、人間は、リスに対しても、決して良き保護者であるばかりではない。

私は、餌をあたえる神になどなりたくはなかった。〔中略〕この三匹のリスに関するかぎり、私は他の誰よりも良き保護者になりうると同時に、また、誰よりもたやすく巧みに捕えたり殺したりできる「敵」になり得そうなのである。(12)

人間は、自分たちの都合のために、動物を捕獲し、品種改良を行い、また、必要がなくなれば処分する。「良き保護者」の立場は、すぐに「敵」の立場に転換し得るのである。語り手は、これを、「選ばれたる民」を選ぶ神の立場に擬える。人間は動物に対し、「神の餌」で生命の選別を行い、「神の指」でそのあり方を操作する。「餌をあたえる神になどなりたくはなかった」という言葉からは、我知らずそのような地位の暴力に与ってしまっているものの不安が伝わってくる。

以上のような語り手の動物に対する考えは、かつて彼が実習生として精神障害者に関

わっていた過去からの影響が大きい。実際、ここで挙げられた動物の特徴の多くは、精神障害者にも重なる。芹沢一也が歴史的に論証するように、「精神病者」とは、「犯罪人、不良少年、浮浪者、乞食者、淫売婦」なども含む、社会の脅威を包括する概念として機能してきたのであり、「多様な社会的存在を単一の階層にまとめ上げる本体のごときもの」<sup>8</sup>に他ならない。ひとたび精神障害者と認定されれば、一人一人の個性は認められなくなる。そして、「治療」の名目において、精神科医によって、その生き方を半ば強制的に作り変えられる。さらには、正常な人間の規範から逸脱するという理由で、虐待、去勢、ジェノサイドなどの対象にもなることがあり得るのである。

ただし、語り手は、精神障害者の苦境を訴えるために、動物を比喩として援用しているわけではない。再度、「私が医師と患者の関係について、思いなやむときにはきまって、人間と動物の運命的なつながりに話が行きついてしまうのである」という言葉を想起しよう。ここで、人間と動物との関係は、医師と患者の関係を規定する、より根源的なものとみなされている。したがって、精神障害者を人間の枠内に救い上げることが問題なのではない。そうではなく、語り手は、精神障害者への差別と排除を根底から規定している、人間／動物の分割そのものを改めて問い直そうとしているのである。

語り手は、「君は入院の資格のある患者なんだからね」（14）と言う友人の精神病院院長に勧められ、本編の手記を書くという設定になっている。しかし、序章の語り手は、人間性の回復を希求するというよりは、むしろ人間の世界の周縁に追いやられた動物たちへの深い共振を表わしている。この点からすれば、この手記は、友人を悩ませているらしい「ストライキ」や「喧嘩腰」の「医師仲間の議論」などと手を繋いで、「正常な人間」という概念に依拠した「治療」への根本的な疑念を提示するものなのではないかという推測が導かれるのである。

### 3. 「治療」というイデオロギー

『富士』の本編では、様々な立場の登場人物たちが入り乱れ、議論を交わす。以下では、その中でも、三人の主要な登場人物に焦点を当て、『富士』の主題について検討を進めていきたい。すなわち、語り手の大島、大島の指導医である甘野院長、そして、かつての大島の同僚であり、今では自分を「宮様」だと主張するようになった嘘言症患者の一条実見である。

戦時下の精神病院という舞台設定は、「ひかりごけ」と同種の問題を提起する<sup>9</sup>。すなわち、私たちが信じる「正常」とは一体何なのか、という問題である。一条は、大島に次のように問いかける。

「君は、狂気で充満しているこの病院の秩序を正常人として守ろうとなさる。狂気でない社会の正常と正義によって、この病院を狂気の混乱から防ぎ守ろうとする。

だが、その君の大切にし頼りにする社会、世界が現在あきらかに狂気におち入っていることは、君だってみとめるだろう。人類は平和人から戦争人へと転化した。これこそ、みんなそろって正常人から異常人に変身してしまったことじゃないのか」  
(63)

「ひかりごけ」で、戦争という殺人行為を支持している国民が、食人を犯した船長を裁くという矛盾が描かれたように、『富士』では、戦争を受け入れ、遂行する「正常人」と、その務めを果たせず、病院での生活を余儀なくされる「異常人」の、はたしてどちらが「異常」なのかという問題が提起される。

例えば、大木戸という元陸軍省勤務の患者は、一の日と八の日、すなわち興亜奉公日と大詔奉戴日になると、決まって発作を起こす。それは、一日も早く「人なみ」に戻って、国家のために尽くしたいという思いが、強い緊張を強いるからなのである。大木戸の発作は、「自分が平常人と共に平凡無事に行動し暮らすことのできぬ、奇怪な動物であること」(73)を周囲に見せつけてしまう。

しかし、一条は、この時代において、「奇怪な動物」から「人なみ」になること、「異常人」から「正常人」になることこそ、実は戦争の狂気に巻き込まれていくことではないかと問う。そして、甘野や大島が携わる「治療」とは、患者を「戦争人」の社会に組み込み、一人残らず戦死に追いやることを目的とした、それ自体狂気じみた行為なのではないか、と告発するのである。

このような問いは、『富士』の同時代にも、別のかたちで問われていた。当時、社会的な条件を考慮に入れて、「狂気」という概念そのものを問い直す必要を主張し、「反精神医学」派とレッテルを貼られた、若き医師たちの集団があった。その一人である小澤勲は、当時主流だった治療法について、次のように批判した。

彼ら〔＝主流派の医師たち〕の呼びかけは「貧しく、いたいけなキチガイびとよ、われにつき従え。しからば汝が神なる正常びとに近づかん」というヒューマニスティックな御託宣であり、彼らにとっての「期待される障害者像」とは「正常者に従順な、せめて正常者なみになった障害者」というところに帰着するようです。〔中略〕ところで、私は今の世の中における労働はすべて疎外労働であり、本質的には強制労働であると考えており、その問題を抜きに「作業療法」を人間解放の過程とすることはできない。また、今の世の中における生活はすべて管理され、隔離分断された収容生活であって、その問題を抜きに「生活療法」を患者生活奪還の方法論とすることはできないと考えているものです。<sup>10</sup>

「作業療法」とは、患者を何らかの仕事に従事させることで回復を図る方法であり、「生

活療法」とは、患者に規則正しい生活を指導することで回復を図る方法である。しかし、この時期、「作業療法」、「生活療法」の名目のもとに、患者たちが病院内で長時間の無給労働を強いられる事件が表面化していた<sup>11</sup>。これを、「作業療法」、「生活療法」の誤用にすぎないとみなす医師に対して、小澤は、療法自体に根本的な見落としがあるのではないかと考えた。というのも、いずれの療法も、「正常者に従順な、せめて正常者なみになった障害者」を生産することを目的とし、「正常者」の社会秩序についての徹底的な内省を欠いているからだ。「正常者」の社会における、生産性至上の疎外労働、生活の隅々まで浸透する規律的な権力こそが、精神障害の要因とも考えられるのに、その点を問わずに、再度患者を社会に復帰させることだけを目的とする行為は、「治療」とは呼べないのではないかというのが、小澤の主張だった。

『富士』では、一条のみならず、一条の攻撃を受ける甘野院長もこのような構造に気づいている。しかし、当然ながら、戦時体制の根底的な改革は、一精神科医に可能な事業ではない。キリストを裁くピラトに自分を擬える甘野は、社会と病院の狭間に立たされ、苦悩を抱えることになる。それゆえ、多くの論者が、『富士』で最も重要な人物として、甘野を挙げてきた。例えば、加賀乙彦は、甘野は、「ただただ耐えしのぶことによって神を求め、神の沈黙によってかえって勇気づけられる信仰者」、すなわち「旧約聖書のヨブ」<sup>12</sup>なのだ論じている。また、三浦雅士は、甘野は「神を必要としながらも神を見出すことができない疲労、決定不可能な事項の前でなお決定を強いられ続けることの疲労」を抱えており、「武田泰淳の思想をほとんど直接的に見出すことができる」<sup>13</sup>とみなしている。

しかし、甘野の言説には、どこか危うさがつきまとうのも事実だ。甘野は、精神に問題を抱える子守女に、幼い息子を殺されたり、自宅を放火されたりしても、それを受忍してしまう。大島は、このような甘野の態度と引き比べ、自分は、患者など存在しなければ良いのに、という暴力的な感情を抑えられないことがあると告白する。それに対して、甘野は、全ての人間に優しくすることなどできないと認めつつも、次のように答える。

「神は、思いもかけぬ啓示、暗示、しるしを我々にあたえる。患者たちがいきなり予告もなしに、我々にあたえるものも同じものなのだ。あまりにも動物的すぎる。あまりにも、人間の醜い半面だけを突きつけすぎる。君のさっきの悩みを解釈すれば、原因はそこにあるだろう。〔中略〕〔しかし、〕患者が悪魔でないかぎり、それと密着したぼくたちも悪魔でありはしないのだ。患者がもし『神』にちかづいているのなら、ぼくたちだって同じ『神』にちかづいているのだ」(144) (□内は、引用者による補足)

これは、一見すると、患者を教育するのではなく、患者から教育されることの重要性を説いた、謙虚な意見のように見える。しかし、大島の悩みの原因を、患者は動物だという思い込みに指摘した上で、患者を神に近づくための同伴者とみなすように勧める甘野の論理には、大きな瑕疵があるように思える。というのも、彼の視線は、患者たちにはではなく、「神」という超越者に向かっているからだ。

これに続けて、甘野は、「精神病患者についての全般的研究なくしては、人類の本質をきわめつくすことはできないよ。だからこそ、君はこの道をえらんだのじゃなかったのかね」（156）とも問いかけている。つまり、甘野の言う「神」への接近とは、神の被造物たる「人類の本質」に関する精神医学的な知の獲得を意味する。このような目的からすれば、甘野にとっては、患者は「異常」であればあるほど望ましい。しかし、そのような態度は、患者一人一人の個性と向き合うことを阻害し、患者の「異常者」としてのカテゴリー化と、医師と患者の絶対的な隔絶をむしろ助長してしまうだろう。

後に、甘野夫人は、甘野が「人間はみんな病人である、しかしその病人がまるで神の指になったみたいにして働かなければならなくなることもある」（365）と言っていたことを明かす。しかし、それにしても甘野の義務感はどこから来るのだろうか。今まで見てきたように、甘野にとっての「神」は精神医学であり、それによって患者を「治療」というのは、戦時社会ではやむを得ないというプラグマティックな判断ではなく、甘野自身の精神医学者としての熱情に発するものだと言える。だが、ネズミを「神」の力を借りてリス化しようという困難な試みに躍起になるよりも、ネズミを、人間の他者として認め、人間としての倨傲を絶えず相対化しながら、互いの共生の道を探っていくほうが遥かに重要ではないだろうか。そのような道を志向しない限り、「人間はみんな病人である」という重要な知見は、ついに絵空事に終わってしまうように思われる。

#### 4. 精神障害者のアイデンティティ闘争

甘野と対比的に、一条は、精神医学の権威を否定し、「異常人」の権利を主張する。一条は大島に、自分たちのことが分からないのは、「この世にはたった一つの秩序しかあり得ないという君の盲信からきている」（63）のではないかと問いかける。そればかりでなく、一条は大島を、別の秩序の世界へ連れ出そうと試みる。

一条は、「接吻してやろうか。君は、されたがっているようだから」（165）と大島を誘う。大島は動揺しつつも、一条が様々な女性を誘惑していることを想起し、「もし君がオンナになりたがっている男なら、女たちを魅惑しようなんて考えるはずがないじゃないか」と反論を試みる。一条は、大島の無理解に寂しげな微笑を浮かべながら、「ぼくがねらっているのは、神の壁一つで分けへだてられたオトコでもなければオンナでもない、何かしらもっと全体的な『性』」（166）なのだと応じる。つまり、一条は、男性／女性からなる異性愛セクシュアリティという、大島の「秩序」を揺るがし、もっと自由な、ク



クィアな性が存在することを教えようとするのである。

その際、大島は、「私は、男どうし二人きりで肩をならべている私と一条が、動物である、動物でありすぎると感ぜずにはいられなかった」(167)と語る。ここでの「動物」という語は、一条によって性規範に亀裂が走った瞬間に登場している。実際、動物の性は多様であり、雌雄同体のものもあれば、雌雄を交換するものもあり、また同性間の性行為も当たり前のように存在する。逆に言えば、「正常人」の秩序——それ自体「戦争人」の秩序でもあることを一条はすでに暴露していた——は、クィアな魅力に満ちた、多様な性のあり方を、大きく抑圧することによって、成立しているのである。

しかし、その後の一条は、患者としてのアイデンティティ闘争を闘う中で、むしろ動物的な生から離脱していくように思える。一条は、御陵に参詣する皇族を待ち伏せ、同じ「ミヤ様」として話しかけ、「日本精神病院改革案」と題した書類を手渡すというパフォーマンスを行なう。その結果、一条は、官憲に逮捕され、死に至る。

一条の思想は、大島に宛てられた遺書で明らかにされる。

「気ちがいのたわごと。まさに、その通り。だが、ぼくがいちばん痛快、爽快なのは、気ちがいにだって宮様になりうるといふ、一つの歴史的事実を自分の一生のうちを選びとれたことなんだ。〔中略〕ぼく流に解釈したミヤは、ほめられたり、あがめたてられたりすることを、何よりもけがらわしいと感じねばならないはずだ。地上の権威や支配とは全く無関係に、ミヤでありうる者のみが、真のミヤである、とぼくは思う」(314)

一条によれば、「真のミヤ」とは、「地上の権威や支配」を脱したもの、すなわち一切の法の例外状態にあるもののことを指す。この点に、精神障害者が、「ミヤ」と並び立てる根拠がある。なぜならば、皇族が、刑法や民法の適用を免れるように、心神喪失者も、ある意味では、同等の例外的地位を与えられているからだ<sup>14</sup>。ただし、皇族が、「ほめられたり、あがめたてられたりする」ことで、自らの地位を保つのに対し、精神障害者は、誰からも理解されず、孤高にその位置を占める。この意味で、精神障害者は、現実の皇族よりも、はるかに「真のミヤ」＝超越者に近いのだ、というのが、一条の論理である。

しかし、このような方法で、精神障害者のアイデンティティを主張する一条の戦略にも、重大な瑕疵がある。第一に、一条の戦略は、精神障害者の特権化、種族化に向かう。つまり、正常人／異常人の二項対立をより強固なものにしてしまうのである。それでは、「正常人」の世界を脅かすことはできても、両者が共生する場所を作り出すことはできない。第二に、甘野院長が分析するように、「自分の意志のちからで、はなばなしく死にたがっている」(301)という点で、一条は、彼をつけ狙っていた憲兵の火田軍曹と「同種」に属する。つまり、一条の行動はヒロイズムに彩られているのである。しかし、ヒロイ

ズムほど、精神障害者の生の実態とかけ離れたものはない。

例えば、患者の庭京子は、「私、させられているのよ」(74)という言葉で、自分の生の徹底的な受動性を表現する。黙狂の岡村少年は、周囲に頑なに心を閉ざしつつも、なお外部との関係を求めて懊悩し、理解不可能な哲学ノートを書き綴る。梅毒患者の間宮は、伝書鳩に強く心を動かされる患者であり、軍によって鳩を奪われると、責任者とみなした甘野邸に押し入り、ついに凶行に及んでしまう。

また、前述の大木戸は、てんかんの発作のたびに、自分の身体の統制を失い、死の恐怖にさらされる。そして、そのような自分に絶望を深め、ついに三度の食事の内容にしに関心を示さない生活に落ち込んでいく。大島は、彼を「単調平凡なくりかえしの中で安定して、少しの変化も発展も示さない患者」と呼び、「生きていてもいなくても、とにかく私の関心と呼びさますことがなかった」(220)と語る。しかし、泰淳自身も大木戸の重要性を示唆しているように、彼が「人間なんて、つまらないものだなあ」(235)とうわごとを言いながら院内で死んでいくさまは、周囲の人間に強い印象を残すのである<sup>15</sup>。

「自分の意志のちから」で「はなばなしく死」ぬ一条は、これらの患者たちが、多様な症状の中で、共通して抱え込んでいた、受動的で他律的な生と、極めて明確な対比をなしている。言い換えれば、一条に、同じ「異常者」として、彼ら／彼女らを代表することはできないということだ。一条は、精神障害者の、自分では統制不可能な生のあり方を裏切り、そこから離反していつてしまったようなのである。

精神障害者の当事者として様々な論考を発表していた吉田おさみは、精神障害者への偏見を批判すると共に、精神障害者を過度に理想化して捉えることに対しても、鋭い批判を差し向けていた。

狂気肯定論は、いうまでもなく狂気—正気、狂人—健全者の二項対立を大前提とし、狂気、狂人を善とし、みずから狂人として自分を分けている向う側の世界、つまり健全者（社会）と対決するというものです。〔中略〕この狂気肯定論は、健全者社会において圧倒的な狂気抹殺論に対するアンチテーゼとして、患者が自己の存在根拠を確認し、その主体形成を助け、患者の自立に資するという点において、その存在意義を否定することはできないでしょう。ただ、この議論は、狂気—正気、特に狂人—健全者の二項対立を固定化し、絶対化しており、“精神病不治説”を裏返しにした形で、患者—健全者間の交流—連帯を阻害することになります。<sup>16</sup>

これを踏まえれば、一条は、精神障害者の主体形成を狙いつつも、それを超越者にまで高めることで、逆にその実像を歪め、国家が設定した正常人／異常人の二項対立をますます強固にしてしまったことになる。既存の権力関係を単に逆転させるだけでは、問

題の解決には繋がらない。むしろ、本来はグラデーションだけが存在する場所に、確固とした二項対立を作り上げてしまう権力の作用を分析し、告発することこそが重要なのである。

ただし、一条は、遺書の終わり近くで、次のように書いてもいた。

小猫が、ぼくの膝にじゃれている。とても、可愛い。小猫のいいところは、ぼくを理解しようなんて試みないことだ。理解しようとされるぐらい、バカバカしいことはありゃしない。『宮様』を理解する？ 理解しちまったら、それっきりじゃないか。どうして、そう解釈したがるのかな。ニセの宮様どもは、解釈や意味づけなしには、生きていかれないらしいがね。(316)

ヒロイズムを志向する一条の前で、再び動物的な生の魅力が広がる。一条の言うように、「理解」は暴力的なものである。しかし、だからと言って、自らを理解不可能な超越者として演出し、殺害されていくというパフォーマンスが、何らかの未来に繋がるわけではない<sup>17</sup>。それよりも、じゃれる小猫が端的に示すように、相互に完全な理解が不可能な存在同士であっても、ときに寄り添い、共生していくことができるというモデルを示すことこそが、重要なのではないだろうか。ミヤ様として計画を決行する直前に、一条の前に現われた小猫は、このようなあり得た可能性を示唆するもののように思われる。

## 5. 治療から分有へ

栗津則雄は、『富士』における大島の固有の性格を、次のように論じている。

この「私」〔大島〕は、身のまわりのすべての人間に対して、おそろしく直接的に反応する。直接的と言うと、対象を、おのれの感覚的好悪で直ちに裁断することと思われるかも知れないが、そういうことではない。この人物には、おのれの感覚的好悪によって対象を遠ざけたり近付けたりする能力が、言わば先天的に欠けている。そして、まさしくそのために、互いに両立しがたいようなさまざまな人物が、遠近法という、「私」とのあいだの突っかい棒を外されて、一挙に、全体的に、「私」の深部になだれこむのである。<sup>18</sup>

つまり、優柔不断で、確たる信念を持たないように見える大島は、まさにその理由によって、多様な立場の人間が、そこで議論し、衝突する場所になっているというのである。実際、逮捕された一条も、軍医として戦地に送られた甘野も、彼らの遺書めいた手紙を、恋人や妻子にではなく、大島に宛てて送っている。そこには、自分たちを深い部分で受け入れながらも、なお別の他者に向けてあいまいに揺れ動く大島を、はっきりと

自分の色に染め上げたいという、彼らの欲望が読み取れるだろう。言い換えれば、大島は、この小説の中でもっばら、他者たちに欲望される身体として存在しているのである。

このような大島の特異性を、ここでは他者への共振の能力と呼ぼう。大島のこの能力は、特に夢を通じて発揮される。『富士』に登場する大島の夢は三つある。第一は、海のマリヤの夢だ。彼女は三つ子のイエスを生む。三つ子は一度死に、三人ともが復活する。これは、ミヤの複数化を図る一条を連想させる。第二は、夏の祭の夢だ。そこで、大島は、美しい母親と少女を守るために、ツルハシを手に正体不明の敵と対峙せねばならなくなる。この母親と少女は、大木戸夫人と患者の庭京子の顔を持つのだが、同時に、甘野夫人と娘のマリをも連想させる。そうであるならば、この夢は、患者と自分の家族の両方を守るために、相手の分からないまま、孤独な戦いを続けねばならない甘野を思わせる。つまり、これらの夢は、大島が、一条や甘野の存在に共振し、彼らに成り代わって見てしまった夢だと考えられるのである。

そして、最も重要なのが、第三の、虫に変身する夢だ。夢の中で、大島は、黙狂の岡村少年と、同じように言葉を発さない、甘野家の子守女である中里きんの二人に、耳から長虫を打ちこまれる。何匹も続けて打ちこまれる長虫は、大島の身体の奥を這い進み、ついには大島自身を「虫でできた人間」(276)に変えてしまうのである。

それでは、ここでの虫とは、何を意味するのだろうか。一条の死後、宮様からの御下賜品によって、病院内では狂乱の酒宴が開かれる。大島は、意識錯乱の中で、虫の夢を想起し、その意味を悟ることになる。

私の脳と神経の内部に、この病院内で死んでいった多数の患者の面影(と言うより、なまなましい生きざま死にざま)が充満し、虫と虫が咬みあうようにしてうごめき、私を苦しがらせた。私の目と私の耳は、私の体内にひしめく死せる患者のムシ集団のほかに、私の外界でざわめいている私の生ける同僚の、咬みあい騒動、ムシ闘争を感じとっていた。虫類。私は、想い出す。想い出さずにはいられない。あの不吉な夢を。あの暗い暗い夢の中で、岡村少年と中里きんは(同志であるにもかかわらず)、私を処刑するため、私の体内に長虫を一匹ずつ射ちこみ、投入した。そして、注射され植えつけられた虫たちは、私の肉の中を爬いすすんだのだ。ゆっくりと、いつまでも停止することなく。私の全身が虫だらけになり、やがて虫そのものに転化するまで……。 (338-339)

大島は、「この病院内で死んでいった多数の患者」及び、今や看護人としての役目も果たせなくなった「生ける同僚」を「ムシ」として理解する。つまり、虫とは、社会的に無用のものとされ、黙殺されつつも、なお、もがき、のたうち回っているもののことである。この点で、虫は動物とその外延を同じくする。しかし、それに加えて、虫には、

他者の肉体に潜り込み、寄生するイメージが付与されている。虫たちは、大島の身体に侵入し、その多様な声を拡散させる。大島は、それらの虫を飼い慣らし、支配することができずに、行動不能に陥る。このとき、大島もまた、社会的に無用な、一匹の巨大な虫へと変身してしまうのである。

この変身が、前述の大島の他者への共振の能力に発することに注意せねばならない。つまり、大島は、社会的に無用とされた者たちと同じ地平で向き合い、共振することで、その存在様態へと限りなく接近していくのである。これは、甘野や一条が、それぞれ精神障害者の生から離脱し、超越的な次元を介在させることで、患者の権利を擁護しようとしたのとは対極的である。国家から見捨てられ、歴史にも記録されないような生、「まるで生存しなかつたようにして、我々からへだてられている」(372) 生を、大島の身体は生き続けさせようとするのである。

そして、大島は、これらの出来事全体を手記として書く決意をする。しかし、それは、これらの虫たちを、書き手の権威のもとに中心化するために行なわれるのではない。彼ら／彼女らの声は、何らの統一を持たないまま、過剰に手記の中に溢れ返る。書く行為を通じて、虫たちは紙魚となつてますます増殖し、手記の宛て先である友人の精神病院院長、ひいてはこの小説の読者たちへと潜り込んでいく。そのようにして、大島は、彼ら／彼女らの自律した人間性の幻想を解体しようとするのである。

これは確かに、グロテスクなイメージである。しかし、大島が体現するのは、このようにあらゆる存在者が、ときに「相手の存在を失わせる」(265) に至るまでに、依存し合いながら生きているという、単純で根源的な世界の姿なのである。他者の依存、寄生を批判できるものは——実際、「寄生虫」という言葉は、ナチスをはじめ、ファシズム的な社会体制において頻繁に繰り返される決まり文句だが<sup>9</sup>——、自分たちを中心に編成された世界の中で、依存を依存と見せないまま「自律」の幻想に浸ってられる、恵まれた存在者＝「ニンゲン」に他ならない。逆に言えば、「ニンゲン」に、依存と寄生という根源的な事実を想起させるからこそ、動物や虫は、ときにグロテスクな存在として、忌み嫌われるのである。

実際、病院での狂乱騒ぎを目にした憲兵の火田軍曹は、次のように吐き捨てる。

「これは病院ではない。これは諸悪の根源だ。これは害虫を育成する温床だ。君らは、日本の国体を内部から腐蝕させる、獅子身中のムシだ。君らは、医師でもない看護人でもない看護婦でもない。君らはそもそも病院職員の名にあたいしない、ムシづくりだ。いや、君たち自身が、ウジャウジャと害虫を繁殖させるムシ屋のかたまり、ムシそのものだ」(358)

火田は、大島らを「日本の国体を内部から腐蝕させる、獅子身中のムシ」だと蔑む。

実際、佐藤泉が指摘するように、「生と死に過剰な意味付与を行う非常時は「英雄」や「英霊」の表象を作り出し、同時に役に立たない生や非国民を作り出す」。その上で、「生のただなかに境界線をひき、生きるに値する生としない生、人間と非人間をその両側に作り出す生政治」<sup>20</sup>を根底から批判すべきだとすれば、それは、国家がもっとも嫌悪する、動物的な、あるいは虫的な生に、徹底的に内在する以外にない。孤独や死を恐れ、そのために他者に依存し、寄生する、そのような存在者の根源的な条件を、否認するのでも、止揚するのでもなく、その事実を前提にした繋がりを構想すること。その先に、「戦争人」の国家秩序を「内部から腐蝕させる」ための可能性も開けてくるのではないか。

『富士』において、結局大島は、いかなる「治療」にも携わることがない。これを斎藤茂太のように、「甚だ奇妙な非オーソドックスな精神科医」<sup>21</sup>と批判的に捉えることもできるが、逆にこの点こそが重要だとも捉えられる。つまり、大島は、医師という特権的な立場から「治療」を施すのではなく、患者と同一の地平に立って、悩み、苦しみながら、あらゆる存在者を繋ぎ合わせる依存＝寄生の関係に自分の身体を共振させるのである。

もちろん、大島が、患者たちの抱える問題に、都合の良い解決をもたらせるわけではない。だからこそ、大島は、それらの声を、手記を通じて、さらに別の他者たちに繋いでいく。治す、すなわち自分たちに同化させるのではなく、異質なものが異質なものとして繋がり合っていること自体が、様々な誤解や衝突を孕みつつも、新しい変化を招き寄せることを信じて、その繋がりを維持し続けること。大島が辿ったこのような軌跡を、治療から分有<sup>22</sup>へ、という言葉で呼ぶことも可能だろう。

終章では、現在の大島の妻が甘野の娘のマリだということが明かされる。そして、友人の精神病院院長は、大島に、「奥さんが希望なさるのでしたら、いつでも入院はひきうけますよ。作業も娯楽も前よりずっと自由になっていますから」(375)と囁く。マリは、伝書鳩の間宮の凶行や、甘野邸への放火などに遭遇し、記憶にはなくとも、心に深い傷を負っていることが示唆されており、院長の言葉はそれを念頭に置いたものだと解釈できる。つまり、大島もマリも、互いに患者としての資格を持ちながら、現在の段階では、何らかの治療に全面的に身を任せるのではなく、傷つきやすい身体を寄り添わせて生きていくことを選んでいるのである。

さらにこの二人には、衝撃を与える事件が起こっている。それは愛犬のポコの死である。二人はポコを車のトランクに入れ、山小屋を目指していたのだが、トランク内の熱気と排気ガスのために、ポコはバスケットから首を出そうとして、蓋に挟まれ、窒息してしまった。ポコの死体を前に、大島は、犬という動物が人間に奉仕するために作られた種であること、そして、そのために人間に殉じて惨たらしい死を死んでしまったことを思う。大島は、「飼犬の性格と運命を、自分たちにつごうの良い変種として定着させた、犬の専門家たちの努力と智慧は、我ら精神科医師の努力と智慧より、素晴らしくもまた、

むごたらしいものと言わねばならぬ」(367) と考える。

このポコの挿話は、改めて、動物を人間化しようとする「治療」の欺瞞を示すものだ。ピンク色の舌を出して動かないポコの姿は、「人間」という理念に振り回され死んでいく、「正常人」、「異常人」、全てのものの傷つきやすさを暴露しているのである。

このような傷つきやすさを隠蔽するのではなく、出発点とすることで、全てのものたちが異質なまま、依存し、寄生し合う、多中心的な繋がりを作り出すこと。『富士』が向かうのはこのような方向であり、この点に、このテキストの、同時代の「狂気」をめぐる言説の中でも、特異な位置を認めることができる。

## 6. 結論

『富士』は、精神障害者と動物の問題が決して分離できないことを宣言する。これは、一步間違えれば、精神障害者への侮辱となる見解である。「精神障害者を動物扱いするなど、とんでもないことだ」という意見は全く正当であるように見える。しかし、そのような論理で精神障害者を擁護する場合、人間的な生／動物的な生という、国家が恣意的に定めたにすぎない生の価値の二項対立はそのままに温存されてしまう。また、精神障害者を、神のごとき知に至るための不可欠な同伴者とみなしたり、あるいは地上のいかなる権威をも否定する超越者にまで高めたりしようとする試みも、結局は、理想化を通じた、精神障害者の生そのものの否認に行き着き、差別を温存することにしかならない。『富士』が、大島という登場人物を通じて最終的に示すのは、動物的として蔑まれる生の次元まで降りていくことの重要性である。大島は、医師と患者という位階秩序を作る「治療」には携わらず、患者たちの声に自らの身体を開放し、共振する。さらに大島は、手記を通じて、それらの声を多くの他者たちへと繋いでいく。こうして、患者を「治療」するのではなく、患者と何ごとかを共有し、患者もそうでない者も、相互に対話を続け、共生の道を探っていくためのモデルが示されるのである。このような、国家が「動物的」あるいは「ムシ的」とみえず依存＝寄生＝共生のあり方に徹底的に内在することで、近代国家による人間／動物の生の選別と管理を乗り越えていくこと。泰淳が『富士』で示そうとするのは、このような道筋に他ならない。

## 註

- 1 田久保英夫「壮大な表現空間——武田泰淳『富士』、『群像』、1972年2月、249頁。
- 2 柄谷行人「富士」、埴谷雄高編『増補 武田泰淳研究』筑摩書房、1980年、466頁。
- 3 佐藤泉「生・政治と文学——武田泰淳『富士』、『紋説III』、2011年9月、107頁。
- 4 佐藤泉「曖昧な肉——武田泰淳『富士』、『現代思想』、2013年10月、166頁。
- 5 これらの詳細な歴史については、芹沢一也編『時代がつくる「狂気」——精神医療と社会』（朝日選書、2007年）の「総論」や、立岩真也『造反有理——精神医療現代史へ』（青土社、2013

年)を参照。

- 6 ジャック・デリダは、《animot》という言葉を作語し、《l'animal》という語が抹消してしまう動物たちの多様性、すなわち複数形の《animaux》を強調している(『動物を追う、ゆえに私は(動物で)ある』、鶴飼哲訳、筑摩書房、2014年)。
- 7 栗津則雄『主題と構造——武田泰淳と戦後文学』集英社、1977年、196頁。
- 8 芹沢一也『〈法〉から解放される権力——犯罪、狂気、貧困、そして大正デモクラシー』新曜社、2001年、131頁。
- 9 「ひかりごけ」では、戦争に加担して「殺人」を肯定する観衆たちが、極限状況を生き延びるために「食人」を犯した船長を「異常」なものとして糾弾するという皮肉な状況が描き出されていた。これに関しては、拙稿「「限界状況」の仮構性——武田泰淳「ひかりごけ」における『野火』への批判点」(『社会文学』、2011年3月)を参照。
- 10 小澤勲「生活療法を越えるもの(一)」、『反精神医学への道標』めるくまーる社、1974年、99頁、101頁。
- 11 当時、小澤が念頭に置いていたのは、十全会系列の精神病院であり、そこでは、「『看護学級』なる名のもとにオムツ交換、洗濯洗面介助、与薬介助、食事介助、病室清掃、ベッド清掃、患者の身のまわりの整理等、朝九時—夕五時まで追いまくられる」ことが常態化していた(小澤、前掲、93頁)。
- 12 加賀乙彦「根源へ向かう強靱な思惟・『富士』」、埴谷編『増補 武田泰淳研究』、480頁。
- 13 三浦雅士『メランコリーの水脈』福武書店、1984年、74頁。
- 14 アガンベンやデリダは、カール・シュミットを参照しながら、この主権者と獣との重なり合いについて詳細に論じている(ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』、高桑和巳訳、以文社、2003年、ジャック・デリダ『獣と主権者 第一巻』、西山雄二他訳、白水社、2014年)。
- 15 武田泰淳、古屋健三「『富士』を語る」、『三田文学』、1972年3月、19頁。
- 16 吉田おさみ「私にとって「精神病」とは何か」、『“狂気”からの反撃——精神医療解体運動への視点』新泉社、1980年、212頁。
- 17 泰淳が一条の死を書きあぐねているときに、三島由紀夫が自殺し、急に筆が進むようになったという挿話は有名である。泰淳は、三島を悼む文章で、「民衆、つまり隣近所があなたを理解できなかった。それ以上に、あなたはニンゲンを理解できなかったのです」と記した(「三島由紀夫氏の死ののちに」、『武田泰淳全集 第一六巻』筑摩書房、1972年、449頁)。
- 18 栗津『主題と構造——武田泰淳と戦後文学』、185頁。
- 19 例えば、ヒトラーは、「アーリア人種だけがそもそもより高度の人間性の創始者であり、それゆえ、われわれが「人間」という言葉で理解しているものの原型をつくり出した」とした上で、ユダヤ人を「つねに他民族の体内に住む寄生虫」、「悪質なバチルスと同じように、好ましい母



体が引き寄せられさえすればますます広がってゆく寄生動物」だと侮蔑している（『我が闘争 上巻』、平野一郎・将積茂訳、角川文庫、2001年、377頁、396頁）。

<sup>20</sup> 佐藤「生・政治と文学——武田泰淳『富士』」、107頁。

<sup>21</sup> 斎藤茂太「解説」、武田泰淳『富士』中公文庫、1973年、637頁。

<sup>22</sup> 「分有」の概念は、ジャン＝リュック・ナンシーに拠っている。それは、何らかの「合一」に帰着せず、「絶対的内在の自己充足をその原理において解体する」ような、有限者同士の関係性である。ナンシーはさらに、この分有の関係は、「人間だけを想定した社会的存在というモチーフを、その原理において大きくはみ出す原初的なあるいは存在論的な「社会性」<sup>ソシアリテ</sup>」だとも強調している（『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』、西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001年、11頁、51頁）。

※ 『富士』の引用は、『武田泰淳全集 第一〇巻』（筑摩書房、1973年）に拠った。

※ 本稿は、日本近代文学会・二〇一四年度秋季大会（2014年10月19日、於広島大学）の口頭発表に基づいている。

